

[基調講演]

JA-IT 研究会の創立 10 周年を祝う

これまでの 10 年、これからの 10 年

今村奈良臣 (JA-IT 研究会代表委員)

農業見直しの胎動—JA は何をなすべきか—

振り返ってみると、この 10 年間 JA 合併が大幅にすすんで、この 1 月 1 日には 716JA と、1950 年、農協創立のころは 1 万 3300 超を数えた JA が、またたく間に、特にこの 10 年、本当に大幅な合併が進行するという事態がみられた。他方で農業就業者の大幅な減少、高齢化の進行、若者の農業離れや地域農業の衰退など、マスコミその他でさかんに論じられてきた。

しかし、3 月 11 日の東日本大震災の発生以降、いろいろな地域を歩いてみると、意外にも農業の見直しの胎動が各地域で起こっていることを痛感している。たとえば若者の U ターン、あるいは中年層の I ターンがたくさん見られる。

私は相変わらず農民塾をやっていて、酒田市でスーパー農業経営塾をもう 20 年やっているが、この 7 月に入塾式をやってみて驚いた。日本の優秀な企業を辞めて、酒田に帰って農業をやるという青年がいる。「おまえ、親父に言われて帰ってきたのか？」と聞くと、「自分の意志で帰ってきた」というのからはじまって、驚くべきことに入塾者の 7 割、4 分の 3 は、今までまったく農業をしていなかったのがやり出した。こういうことが、センサスなどにどう反映するのかよくわからないが、大震災を契機になにか違う動きがあるのではないかという感じがしている。本日の報告の中からも新たな胎動を見出して頂きたいと思う。

農業 6 次産業化の原点

もう一つだけ触れておきたいのは、私の郷里は大分県だが、大分県の西の方に大山町農協というのが

ある。山、谷ばかりで平地は 70~80ha くらいしかないような中山間地域だが、おそらく日本では直売所の草分けだと思うが、22 年前に「木の花ガルテン」という直売所をはじめた。その直売は、青果だけではなくて加工品が多彩に出されていた。



18 年前のことだが、私はほぼ 1 週間、そこで農家に泊まり込んで、じっくりと調査をさせていただいた。そのなかから私は、 $1+2+3=6$ という農業 6 次産業化論を考えついた。

大山町農協では、矢幡治美という名組合長が、50 年前に「ウメクリ植えてハワイへ行こう」というスローガンを出した。これが若者たちの心を掴んだ。中山間だから傾斜地にウメとクリを植えていこう。しかし、ウメとクリの実を売っても二束三文だ。だから梅干しを漬けよう。クリを元にした菓子をつくろう。クリの焼酎をつくろうとか、さまざまな加工を考え「木の花ガルテン」で販売した。そういう活動を調査する中で 6 次産業化ということ考えた。

ところがバブルの時代に、土地を売ればカネになるという馬鹿な指導者が出てきた。そこで、農地がなくなり農業がなくなればすべて終わりだよということを考えさせるために、 $1 \times 2 \times 3 = 6$ と掛け算にした。農業がなくなれば $0 \times 2 \times 3 = 0$ になってしまうという警鐘だ。これが 14 年前のことだ。大山町農協の組合員のなかにも一人として「大山は条件が不利だからどうにもならん」ということを言う人はいない。

大山町農協は大分市に木の花ガルテンの直営店を 2 店舗、インショップを 3 店舗、それから福岡市には直営店を 2 店舗、別府市に 1 店舗、日田市にも 1 店舗持っており、朝 8 時になると、5 台の保冷車がバーっと出ていく。組合員の皆さんは決められたとおりに保冷車に積み込んでいる。そういうシステムをつくっている。大山を見ていると、他は条件有利なところばかりだ。だから、立地条件が悪いということはい訳にはならないと考えている。

話は変わるが、私は何度も中国に行っているが、指導者たちは「中国はすでに全力をあげて 6 次産業をやっている」と遼寧省でも江蘇省でも聞く。しかしよく聞き、実態を調査すると、中国の場合、竜頭企業が農産物加工業や集荷業者を支配下におき、それが農業・農民を押さえつけている。確かに 6 次産業は 6 次産業だけれども、 $3 \times 2 \times 1 = 6$ というふうに逆転していて、3 のほうが儲けて、そのおすそわけというか、スズメの涙を農業に与える。それでは地域はよくなるはずがない。

世の中にはこういう問題がたくさんあるように私には思えてならない。その本質を見抜きながら、新しい路線をこの JA-IT 研究会ではおおいに蓄積していきたい。

今こそイノベーションを推進しよう

JA-IT 研究会のニュース第 9 号の 10 周年記念の巻頭論文「今こそイノベーションを進めよう」で、3 つの問題提起をした。

「JA ほど人材を必要とする組織はない。いかに人材を増やし、その質と量をいかに高め広げるか」ということが第 1 の課題。第 2 は「JA は地域の生命線」。その核心は生産販売戦略の革新と向上をはかり、食と農の距離をいかに縮めるかという問題だと思う。第 3 は、「農業は生命総合産業であり、農村はその創造の場である」。

これが私の基本スタンスだが、「その基本原則を踏まえ、JA は地域農村社会の中核となり、望ましい将来像を実現する努力を積み重ねなければならない」。こうした課題の実現のためには、全力をあげてイノベーションを推進しなければならないと思う。どうすべきかは、第 9 号を読んで欲しい。この JA-IT 研究会でこういうことを具体的なレベルでお話ししてきたつもりだ。あとで読んでいただいて、あるいはかつて私の話を聞いた方々は具体的なことを思い出していただきながら、これからなにをやるべきかということをぜひ考えていただきたい。

今回の第 30 回公開研究会では、10 周年記念となるにふさわしい論客を得ることができて、大変うれしく思っています。10 周年記念を機に、皆さんが明日からもますますがんばっていただくことを祈念いたします。